

## 【概要】

# 人文学部日本文学分野における小泉八雲を対象とした卒業研究指導

小谷 瑛輔

富山大学人文学部東アジア言語文化コース日本文学分野ではここ数年、小泉八雲をテーマとする卒業研究が続いた。2016年度、2017年度のもの、それぞれ三島佳音「ラフカディオ・ハーンにおける日本語の音——日本語の響きと出雲方言<sup>1)</sup>」、濱野美典「児童文学史における小泉八雲の再話作品の位置<sup>2)</sup>」として既に公開されているが、今回の報告では、2018年度卒業論文提出予定の石井花による卒業研究を紹介した。

その内容については本誌に寄稿される予定であるためここでは詳細は省くが、稿者は今年度をもって富山大学を退職し、日本文学分野における小泉八雲に関する卒業研究の指導もここで一区切りとなるので、本稿では、シンポジウム当日は簡単にしか示すことのできなかった小泉八雲に関する卒業研究の近年の傾向の分析と、ヘルン文庫の教育への活用についての提言を記しておきたい。

ヘルン文庫の強みは、何といても八雲の旧蔵書をはじめとした八雲関係の一次資料が保管されているところにある。しかし残念ながら、この3年間、蔵書の書き込み調査や典拠論など、それらを生かした卒業研究は行われてこなかった。これは卒業研究だけでなく、演習や講読などで学生グループが八雲をテーマに選択する場合でも同様である。その原因としては、人文学部において作家の自筆資料調査の方法論まで指導が至っていなかったことがあるが、八雲の蔵書調査においては語学力が必要になる場面も多く、日本文学を専門とする教員や学生が取り組む課題としてはハードルが高かったこともある。まさにこうした研究に取り組むことを特徴とする比較文化分野が存在した頃には、学生による蔵書調査もなされていた<sup>3)</sup>が、比較文化分野そのものが2014年度までで廃止となってしまったことは、本学のためには非常に残念なことであった。

今後は、日本文学分野以外の分野でも、蔵書調査の実習的な教育が模索されれば、ヘルン文庫を活用した卒業研究が促進されるのではないだろうか。

---

1 三島佳音「ラフカディオ・ハーンにおける日本語の音——日本語の響きと出雲方言」(『富大比較文学』2017年3月)

2 濱野美典「児童文学史における小泉八雲の再話作品の位置」(『富大比較文学』2018年3月)

3 その時期に在籍した学生の研究成果としては、今村郁夫「ヘルン文庫書き込み調査——和漢書を中心に」(『富大比較文学』2008年11月)、「ヘルン文庫の和漢書——蔵書傾向と書き込み調査」(『富大比較文学』2010年12月)、「小泉八雲のヘルン文庫——『狂歌百物語』への書き込みの考察」(『社会文学』2009年2月)、「小泉八雲『常識』研究—ヘルン文庫書き込み調査から—」(『富山大学大学院人文科学研究科論集』2011年2月)、「原典の書き込みから見る小泉八雲「常識」——ヘルン文庫調査から」(『群峰』2017年3月)などがある。

さて、ではこの3年間で行われてきた学生の卒業研究での八雲の研究がヘルン文庫と無縁のものであったかといえ、もちろんそうではない。ヘルン文庫のもう一つの強みは、八雲に関する二次資料を網羅的に収集していることにある。日本文学分野の卒業研究や演習・講読での研究発表において、八雲をテーマに選ぶ学生が続いたのは、この二次資料の集積によるところが大きい。

小泉八雲は、膨大な研究の蓄積のある作家であり、かつ、多様な領域の研究者が参画してきたことによって、論点や切り口が多様に展開してきたことが特徴である。加えて、テーマごとの論文個別検索が容易な雑誌論文ばかりでなく、論集形式の書籍や単著など、検索が容易でない形態で蓄積されてきた研究成果も多い。そのため、インターネットによる情報検索が容易になる前の時代のように、芋づる式で文献を手繰り寄せ、研究書を網羅的にめくっていくようなことができる環境でなければ、先行研究を把握することも難しい。

これは八雲研究全体の課題でもあろうが、逆に言えば、ヘルン文庫のように二次資料が充実している環境があることは効率的に研究に取り組むための重要な条件となっていることは間違いない。この環境は、今後もさらに整備されていくことが望まれる。

とはいえ、卒業研究に取り組む学生にとって、ヘルン文庫に期待したいものが二次資料だけなのかといえ、そうではない。

たとえば今回のシンポジウムで紹介した石井花による卒業研究では、「若返りの泉」と「夏の日の夢」の本文異同調査が重要な点となったが、その報告の中で触れられたように、「夏の日の夢」自体にも複数の本文があり、しかも、書誌的な基本事項については、先行研究の中でも混乱がある。「夏の日の夢」は、『東の国から』に発表されるまでに『ラフカディオ・ハーン著作集』の年譜<sup>4</sup>によれば『ジャパン・ウィークリー・メール』1893年8月28日、『ジャパン・メール』1894年7月28日、『タイムズ・デモクラット』1894年10月14日の3度にわたって発表されていたことになっているが、『東の国から<sup>5</sup>』には「“The Dream of a Summer Day” first appeared in the “Japan Daily Mail”」と初出情報の記載があり、この媒体名は、上記年譜のいずれとも一致しない。『小泉八雲事典』では、立項していない作品が多い中で本作については立項されているものの、初出の書誌情報についての言及がそもそもない。『ジャパン・ウィークリー・メール』1893年8月28日を含めずに1894年7月28日を初出とする年譜類もある<sup>6</sup>ようだが、結局何が正しいのかは、個別に一次資料を確認するよりないのである。

しかし、ヘルン文庫は一次資料の収集に努めてきたものの、初出紙誌は手薄というのが実情である。上記の英字メディアについてはいずれも、現物もコピーも所蔵されていない。石井の

4 『ラフカディオ・ハーン著作集』第15巻（恒文社、1988年9月）

5 Lafcadio Hearn *Out of the East*, Boston: Houghton, Mifflin, 1895.

6 坂東浩司『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』（英潮社、1998年3月）

研究でも、一部の一次資料については未見の状態でシンポジウムでの報告が行われた。なおこの研究課題については、シンポジウムのディスカッションで得られた示唆に基づいて横浜開港資料館の資料調査を行ったようで、最終的に「若返りの泉」の改稿時期が判明することとなった。本誌掲載の石井論文では、その成果も含めた内容となっている。

八雲の場合、初出媒体が国内の日本語文献に限られないこともあって、日本文学の研究対象としては、一次資料の収集、確認をその都度行うことは比較的困難な部類に属する。しかし言うまでもなく、書誌や本文異同の調査などは文学研究においては第一の基礎とも言えるものであり、膨大な研究が蓄積されてきた八雲研究において、そこが未整備となっていることは大きな欠落である。そのことを考えれば、ヘルン文庫において一次資料をさらに収集していくことの価値は高く、研究を促進するものと言える。

ヘルン文庫には、檜山茂氏寄贈の『Cincinnati Enquirer』『Cincinnati Commercial』のコレクションなど、貴重なものも所蔵されている。これについては水野真理子の報告<sup>7</sup>が詳しいが、八雲の記事が掲載された英字新聞類を、現物の入手が難しいものはコピーで済ませるものも含めて網羅的に収集しようとするならば、相乗効果的にこうした資料の価値を高めることになるだろう。

本文異同の調査などは、資料の閲覧が容易な環境があり、時間と手間をかけることさえ可能であれば、学部生などの初学者でも取り組みやすい。専業の研究者による研究か学生による卒業研究等かを問わず、八雲の研究の進展を可能とする環境整備の鍵はそのあたりにあると思われる。今後の課題として提言しておきたい。

---

<sup>7</sup> 水野真理子「シンシナティ時代におけるラフカディオ・ハーンの新新聞記事概要（富山大学ヘルン文庫所蔵）」（『研究紀要 富山大学杉谷キャンパス一般教育』2016年12月）